

青丘文庫研究会 月報

No.289

2017年11月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (公財)神戸学生青年センター内

TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp

①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)

②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)

郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000 円

※ 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として 2000 円/年をお願いします。

第 308 回朝鮮近現代史研究会 2017 年 3 月 12 日

「上海映画と朝鮮独立運動」

鈴木常勝

1919 年、上海に「大韓民国臨時政府」が成立した。その後、日本帝国の植民地支配下の朝鮮を脱出して、「朝鮮独立運動の中心地」上海に、才能ある朝鮮映画人が集まった。無名時代の金焰が彼らから支えられ、人気スターとなった金焰が彼らの活動を支えた。「上海爆弾事件」の尹奉吉、金焰、金学鉄、



ニム・ウエールズの本「アリランの歌」の主演・金山は、同時代の上海で、学び、滞在し、暮らした。

①龍井・延吉（現在の中国・延辺朝鮮族自治州）で生まれた詩人・尹東柱、そこで暮らした作家・金学鉄二人は戦中、反日行動により九州の諫早刑務所に入れられた。

②上海で暮らした作家・魯迅と、上海映画のトップスターとなった朝鮮人・金焰、

③台湾・台南で生まれた作家・楊逵、そこで生まれ上海で活動した台湾人作家・劉呐鷗。台湾人の劉呐鷗は、朝鮮人の金焰に、日本軍占領下の上海で、映画出演を持ちかけた。朝鮮人の金焰と台湾人の楊逵は、それぞれ魯迅を敬愛し自らの反抗精神を奮い立たせた。

彼らの 1930 年代から 2000 年までの活動の軌跡が、私の注目点だ。

私は今年 2 月に台湾・台南に行き、タパニ事件の現場・玉井（ユイジン）を訪ねた。

1915 年、台湾人は日本支配に反抗して、武装蜂起した。日本軍は村を焼き払い、逮捕者約 900 人に死刑判決を下した。後に 800 人ほどは無期懲役に変えた。事件は、漢人を中心とする植民地下台湾での最大の蜂起だ（その後 15 年して、霧社蜂起が起こされる）。

土地の人が、オートバイの後ろに私を載せて、「戦場」まで案内してくれた。そのおっちゃんの話によると、「この盆地でゲリラ戦で闘った」とのことだった。生駒山の中腹から見下す大阪平野ほどの広さの、このユイジンの盆地をながめながら、私は「日本人がほとんど知らない台湾人の反日蜂起」と「日本軍の徹底した弾圧ぶり」を改めて想像した。

台湾原住民のシラヤ族が名付けた地名 *tapani*（タパニ）を台湾占領後の日本が玉井（たまい）に変え、蒋介石の中華民国時代から玉井を中国語読みでユイジンと発音する。

オランダの台南占領時代、オランダ人は *tapani* 付近でキリスト教を宣教し、ローマ字つづりのシラヤ語の聖書を作った。その聖書から当時のシラヤ語がわかるということだ。

このように玉井という一つの地名から、台湾の重層的な歴史が表れている。

私は学生時代、魯迅を愛読した。台湾人作家・楊逵（ヤン・クイ）の文と出会って、楊逵研究に取りかかろうと思った。日本占領期と蒋介石独裁下に生きた彼の文は、くやしさと温かみにあふれている。今年、国立台湾文学館（台南）の推薦により、「外国人台湾小説研究者」として3か月の台南滞在が認められた。今まで「日本軍の上海映画工作の手先」「日本側に身を寄せた売国奴」と見なされていた劉呐鷗の心根に近づくのにも、良い機会だ。資料と現場が待っている台南へ！

第380回在日朝鮮人史運動史研究会関西部会 2017年3月12日

名古屋市立朝鮮学校の設置・存続・廃止 吳永鎭

1949年11月に設置され1966年3月に廃止となった名古屋市立小学校分教場としての朝鮮学校——名古屋市立朝鮮学校を対象に、その設置・存続・廃止過程を、それぞれの局面における各アクター（政府、文部省、愛知県、名古屋市、朝鮮人団体、朝鮮学校関係者等）の意図とその関係性に着目して検討した。

名古屋市立朝鮮学校に関しては先行研究の蓄積もなく、特に教育の実態を示す文書資料はほとんど存在しない。そのため本報告では行政文書のみならず、同校の教育実践記録、同校で教鞭を執った者たちへの聞き取り調査、朝鮮人団体の資料、朝鮮人団体発行の新聞等を用いた。

まず、文部省主導下の学校閉鎖措置後の対応として、名古屋市において公立朝鮮学校が設置される経緯を確認した。1949年11月、愛知県内全ての朝鮮学校が閉鎖される中、負傷者、検束者も出す児童らを含む朝鮮人当事者の激しい要求によって、公立小学校分教場としての名古屋市立朝鮮学校が設置された。名古屋市は学校閉鎖に伴う朝鮮人児童の転入先学校への収容が困難なため、仕方なく暫定的にこれを設置したに過ぎなかったが、それらの学校では朝鮮人教員と日本人教員との協力関係の下、朝鮮人児童のための民族教育（朝鮮語、朝鮮歴史、朝鮮地理といった民族教科の実施や、学校内での朝鮮語常用等）が次第に導入されていった。

次に、設置された学校において「公立学校の教育」の範疇を超える極めて独特な形態の教育が行われていたことを明らかにした。名古屋市立朝鮮学校では、公立小学校の分教場であるにも拘わらず門札には朝鮮学校としての校名が掲げられ、朝鮮民主主義人民共和国の国旗が掲揚された。学区も日本の公立学校よりはるかに広く、担任は日本人と朝鮮人が一人ずつついた。1950年代中盤以降は朝鮮人教員の数とともに、民族教科の授業時数も増加していった。無論日本人教員・日本語による授業も続けられたが、多くの科目を朝鮮人教員が朝鮮語で担当した。その教育は、民族教育と公立学校の教育との対立図式よりもむしろその調整の中で創造されていったものと捉えられるものであった。このような特異な学校が廃止されず存続した背景には、日本人と朝鮮人との教育を軸とした関係、また近隣日本学校ならびに地方行政との交流、友好関係といったローカルな関係性があった。

1960年代には、朝鮮人団体内部での葛藤を孕みながら公立廃止に向けた動きが登場し、それが公立朝鮮学校の「正常化」を企図する政府の意向と奇妙な形で合致することによって、名古屋市立朝鮮学校は廃止されることになる。学校当事者たちの様々な工夫によって「民族教育か、公立学校の教育か」という二項対立図式を調整し乗り越えてきた名古屋市立朝鮮学校の教育が、民族教育と日本の公立学校の教育、それぞれの「あるべき姿」から逸脱していたが故に、同校はその幕を閉じることを余儀なくされたのである。こうして1966年3月31日をもって名古屋市立朝鮮学校は廃止されることとなった。

第382回在日朝鮮人史運動史研究会関西部会 2017年5月14日

戦後、在日朝鮮人と河川敷居住 本岡 拓哉

つげ義春が1981年に発表した『近所の景色』は、多摩川河川敷に暮らす在日朝鮮人である李さんの生活と雷魚をめぐる主人公との交流を描いた作品である。物語の終盤、李さんが台風後にいつしか自主的に立ち退き、彼が暮らした廃屋を主人公がノスタルジックに眺める場面は印象的である。

本報告では、こうした戦後都市における在日朝鮮人の河川敷居住がいかなる実態であったのか、さらにはそうした空間が生成し、消滅するまでの過程とはどのようなものであり、当時の社会的状況や政治がいかに関与していたのか、幾つかの資料を頼りにアプローチした。

まず、そもそも戦後において河川敷という空間が居住地になった背景およびその後の展開について確認する。戦後の日本では都市に引揚者を含む過剰な流入人口が発生し、戦災による住宅不足と相まって深刻な住宅難が生じていた。そのため、住宅を求める人々は、放置され権利関係が曖昧な河川敷にスクウォッシング（占拠）を始め、バラック（仮小屋）を自分たちで建てていった。河川敷は都市中心部への至便性が高く、戦時期に中断していた河川整備の再開が遅れたこともあり、とりわけ十分な資財を持たない在日朝鮮人にとって格好の居住地となったのである。さらに当地では廃品回収業（バタヤ）や養豚業を営み、一定程度の生計を立てる条件となった。

河川敷居住が始まった時期は地区ごとに一様ではないが、おおむね1950年前後には各地で河川敷居住の拡大がみられるようになった。そもそも都市への流入人口の急激な増大が背景にはあるが、そのほか、公園や高架下などから立ち退きとなった者が住まいを求めて河川敷に流入することによって、河川敷居住は次第に拡大したのである。

その後、地区によって行政によって立ち退きが進められ、消滅する事例が出てくるが、河川敷空間への管理が本格的に強まっていくのは1960年代に入ってからである。1960年に国（建設省）による「治水事業十箇年計画」が実施され、国および各自治体の河川整備予算が拡大するとともに、1964年に新河川法、翌年に「河川占用敷地許可準則」が制定された。この結果、河川敷の整備・管理が公的に強化されるとともに、よりいっそう私的な所有が排除され、防災公園や遊歩道といった「公的」な機能のみが許容されるようになった。このような中、各地では、国（建設省）・県・市が連携することによって、不法占拠対策に取り組んでいくようになった。

行政は河川敷居住者に対し、かれらが河川法に違反する「不法占用・占拠」者であるとして、自主移転を促していくことになる。しかし、居住者の多くは立ち退き先の住宅や仕事の問題から、自主移転に抵抗する者も多く、居住者組織による反対運動も展開した。そのため、自治体によっては住宅地区改良事業により公営住宅団地を提供することで、穏便な解決を図っていく場合もあった。

行政は戦略的立場からメディアを通じて、河川敷で「不法」に住まう居住者を、防災など公共性を阻害する「悪」として位置づけ、他の市民の支持を得るよう画策した。また、居住者が主張する住み続ける権利や代替措置を否定するとともに、移転補償金の提示、公営住宅の提供や斡旋という点で行政上最大規模の手当てを行っていることを提示した。これは、強制的撤去による「ハードな立ち退き」というよりも「ソフトな立ち退き」と理解されるが、結果的に河川敷から人々は追い立てられ、新たな住まいに移ることになった。冒頭の李さんもその一人なのかもしれない。

以上、戦後のある時期、都市における河川敷という空間は、在日朝鮮人にとって一つの生活や労働の場

として機能していただけだけでなく、行政との間で「空間の政治」が展開した場とも言える。現在、景観が全く変化したなか、このような生活や労働の場としての河川敷の「記録・記憶」もほとんど表には残っていないが、それを一つ一つ丹念に発掘し、辿り直していくことで、新たな戦後都市社会史および在日朝鮮人史の提示に繋がるかもしれない。

在日朝鮮人史研究47号 2017年10月31日(緑蔭書房、A5、276頁、2400円+税)
 ※特価 2000 円(送料 164 円)で販売します。ご希望の方は、2164 円を、<00970-0-68837 青丘文庫月報>にお送りください。

<目次> 「協和会」研究の成果と課題 木村健二/柳原吉平衛所蔵資料に見る「大阪府内鮮協和会」 塚崎昌之
 「巢鴨事件」の在日朝鮮人像―事件へのかかわりとそれぞれの生 川口祥子/解放後在日朝鮮人運動における「関東大虐殺事件」の真相究明・責任追及(一九四五～四九) 鄭永寿/在日女性同人誌『鳳仙花』研究―マイノリティ在
 日朝鮮人女性言説の世界 崔順愛/なぜ在日コリアンは全国に存在するのか―定量分析を用いて 李光宰/地域の在
 日朝鮮人のライフストーリーと歴史学習 鮎澤譲/太平洋を渡る在日コリアン・韓国系アメリカ人の生活史―日米韓三ヶ国間
 移動からアイデンティティを検討する キム ソニア/研究会の記録(2016.9～2017.7)

●青丘文庫研究会のご案内●

■第388回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

2017年11月12(日)午後2時～3時半

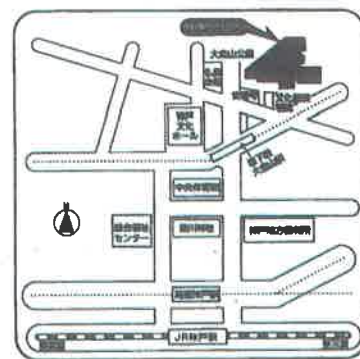
「1920年代の『内鮮』融和政策と夜学校―神戸を中心にして」(仮題)

高木伸夫

■第312回朝鮮近現代史研究会 午後3時半～5時

「サハリンにおけるコリアンディアスポラをめぐる」 李月順

※会場 青丘文庫(神戸市立中央図書館内、TEL 078-371-3351、新館3階で身分を証明するものだして入館証を受け取り4階会議室にお越しください。)



【今後の研究会の予定】来月以降の予定。12月10日(日)在日(塚崎昌之)、近現代史(未定)、2018年1月14日(日)在日(未定)、近現代史(長志珠絵)、研究会は毎月第2日曜日です。報告希望者は、飛田または水野まで連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】12月号以降は、松田利彦、西村寿美子、玄善允、川口祥子。よろしくお願いします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】■台風がふたつもきましたがいかがでしたでしょうか?1頁写真は涸沢の紅葉、きれかったです。■月報の発行が4月号以来となりました。申し訳ありません。研究会は定期的に開催されています。この間、メールで案内しています。希望者は飛田 hida@ksyc.jp まで連絡ください。■8月の日韓合同研究会は群山で開催されました。堀内さんが『むくげ通信』にレポートを書いています。むくげ通信のホームページからご覧ください。■本号に収録できなかった研究会レポートがあります。順次掲載の予定です。